

## 留学・研究計画書

氏 名 諫早 直人	留学機関名 慶北大学校
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2006 年 4 月 ~ 2008 年 3 月
研究テーマ (留学目的) 古代東北アジアにおける騎馬文化の研究	
研究テーマ (留学目的) の説明 (テーマの学術的・社会的意義についても必ず記載してください)	
<p>私は修士論文において「東北アジアにおける馬具製作技術の展開」という題目で、東アジアで実物の馬具が比較的多く出土する中国東北地方、朝鮮半島、日本列島における轡を中心とした古代の馬具製作技術の変遷について考古学的検討をおこないました。</p> <p>かつて東京大学の江上波夫先生が騎馬民族征服王朝説を提唱し、大反響となったように、5世紀代以降日本列島に導入・普及していく騎馬文化のインパクトは日本の国家形成を考えるうえで無視できません。しかし、江上氏の性急な議論に最近まで資料が追いついていなかったことも事実で、特に大陸における実物資料の不在もあって、物質資料に依拠する考古学の側からは批判が集中していました。ところがここ十数年間、韓国、中国の目覚ましい社会発展の副産物として、大量の遺跡が発掘されました。その結果、これまで馬具の空白地帯であった朝鮮半島南部で資料が急増し、その成果は4～5世紀代の東アジアの騎馬文化、そして日本列島における騎馬文化の導入を考えるうえで無視するできないものとなりました。また中国東北地方においても当時の鮮卑王朝である三燕の墳墓が次々と発掘され、そこから馬具が出土しています。</p> <p>そのような資料の蓄積を認識し、それら個々の遺物に対する徹底的な観察から当時の騎馬文化の展開をトレースしていくことは、当時の日本列島も含めた東北アジアの地域間関係を考えるうえで新たな視点をもたらすものと考えられます。また、新たな資料をもとに国民的関心事である騎馬民族日本列島征服王朝説に対して、考古学の立場から実証的に再検討を加えることは、考古学を研究するものが社会に対して果たす役割のひとつであろうと確信しております。</p> <p>私のテーマは日本列島の騎馬文化を東北アジアという広い視点から考古学的に考えていくことですが、当面の研究戦略として韓国に注目した理由としてはこの地域が日本列島と隣接し、古くから現在に至るまで相互に密接な影響を与え合っていたからです。それは騎馬文化の導入においても同様で、直接的な影響はやはり朝鮮半島の諸国(高句麗、百濟、新羅、伽耶)に求めることができます。そして4～5世紀代の馬具が東アジアの中で最も多く出土していることもあり、考古学的な検討を加えるのに最適なフィールドと考えられるためです。また考古学の世界においては日韓の研究者間の交流が盛んで、資料の実見にも支障がないことから、長期滞在し、時間をかけて調査をおこなえば、確実に成果が挙げられるであろうと考えられます。留学希望校である慶北大学校は考古学が盛んで、特に朴天秀先生は大阪大学に留学し、古代日韓交渉の考古学的研究をリードする研究者の一人です。また慶北大学校の所在する大邱は韓国の中心部に位置し、地理的にも各地へ資料調査に行きやすい環境といえます。以上のような理由から韓国慶北大学校への留学を切に希望しています。</p>	

# 成果報告書

記入日 2008 年 3 月 30 日

氏名 諫早 直人	留学先国名 大韓民国	所属機関 京都大学大学院文学研究科博士後期課程 日本学術振興会特別研究員 (DC2)
研究テーマ :	古代東北アジアにおける騎馬文化の研究	
留学期間 :	2006 年 3 月 ~ 2008 年 2 月	
<p>私の研究テーマは「古代東北アジアにおける騎馬文化の研究」である。このテーマ自体、特定の国を対象とするものではない。騎馬文化を研究するのであれば、ユーラシア大陸の端に位置する韓国よりは中国東北地方やモンゴルに行くべきであろう。私がこのようなテーマを掲げた上で、韓国を留学先として選んだ理由は、もちろん日本というゴールを意識していたためでもあるが、現状において最も資料が蓄積し、何よりも実地調査を進め易い国であったためである。考古学という物言わぬ遺跡や遺物を扱う学問をするにあたって、何よりも重要な作業は対象資料の実見である。それもただ漫然と見るのではなく、できるだけ時間をかけて見る必要がある。また見る(実見)よりは描く方(実測)がより多くの情報を得ることができる。そして、偶然地下に残され、偶然発見されたものを扱わざるを得ないという学問的限界を意識するならば、対象となる資料が多いほど安定した議論が可能となる。つまり、ある程度豊富な資料を対象とし、それらをできる限り多く、かつじっくり見るといって誠に地味な作業が必要なのである。</p> <p>そういった目的意識のもと、この2年間、730日のうちの実に多くの時間を資料の実見、実測に費やした。むろん対象資料は自分のいる大学、地域にだけあるわけではなく、各地の様々な機関に自ら出向いて見せていただくことになる。幸いにも韓国の諸先生・諸機関のご協力の甲斐もあって、留学期間中に22の機関で328点にものぼる資料を実測することができた。実見したものはその倍近くにはなろう。しかし、このような調査をするだけなら、効率の点を差し引けば、敢えて留学という形をとらずとも調査可能である。私がこの2年間、できる限り心掛けたのは、韓国人研究者との成果の共有である。つまり単に資料を見て、自分の研究に必要な情報を獲得するだけの消費者ではなく、その成果を韓国人研究者と共有し、できるなら一緒に何かの成果を生み出そうと努力した。近年の海外調査は、共同調査が基本になりつつあるが、研究水準の異なる被調査国側の研究者と目的意識を共有しない、名目的なものに留まる場合が多い。私はもちろん年齢が若いのでそうせざるを得なかった部分もあるが、自分の観察視点や考えを率直に伝え(盗まれる危険性を顧みず)、相手の意見を聞き、知見を共有し、機会があればその成果を共同で報告するよう努めた。それらの成果を列記すると以下の通りである。</p> <p>〔報告作業〕 *全て韓国語。ハングルは日本語に訳している。</p> <p>成正鏞・中條英樹・権度希・諫早直人 2006年6月「百濟馬具再報(1)―清州新鳳洞古墳群出土馬具―」『先史と古代』24、韓国古代学会</p> <p>成正鏞・権度希・諫早直人 2007年10月「鼓楽山城と馬老山城出土馬具について」『湖南考古学報』27、湖南考古学会</p>		

諫早直人・李炫姪 2008年2月「高霊池山洞44号墳出土馬具の再検討」『慶北大学校博物館年報』第5号、慶北大学校博物館

〔報告書作業(図面提供)〕

忠北大学校博物館 2007『忠州金陵洞遺蹟』

韓国文化財保護財団 2007『蔚山下三亭遺蹟・芳里甕器窯址』

このような一次資料に密着した共同作業は未だ一般的とは言えず、もちろん全てが計画通りうまくいったわけではない。しかし、一つ一つを形にしていくことで、それが前例となって次の調査が始まるという連鎖反応が確かに生まれつつある。留学は終了したが、いくつかの共同研究が継続中であり、今後も一つ一つその成果を発表していく予定である。

研究の進捗状況としては2年の留学期間中に、国際学会における発表(諫早直人2007年2月「馬具製作技術からみた騎馬文化の東漸」『アジアの地域文化と文化交流』、全南大学校 BK21CAA+ 専門研究人力養成事業団 第1回国際シンポジウム)と、論文(諫早直人2007年11月「製作技術からみた夫餘の轡と韓半島南部の初期轡」『嶺南考古学』43、嶺南考古学会)、資料紹介(諫早直人2007年2月「慶州月城路タ-6号墳出土複環式環板轡の再検討」『慶北大学校博物館年報』第4号、慶北大学校博物館)を発表することができた(いずれも韓国語)。前2者は博士論文の一部となるものである。綿密な資料観察に基づき、製作技術的観点から韓国の資料をその源流である中国東北地方やモンゴルの資料と比較したもので、従来の韓国考古学には見られなかった広い視野と緻密な視点から馬具の系譜問題について考察をおこなった。草原地帯に発生した騎馬文化が、日本列島へ導入されるまでの道程を明らかにする上で、最も重要な鍵を握る韓国において、十分な資料調査を行いえたことは、この二年間の最大の収穫であった。同時に韓国には日本には認められない北方的要素が濃厚に認められ、単なる通過点や日本考古学の比較対象に留まらない韓国考古学の奥深さを、実物を通じて改めて感じる事ができた。

また、順天大学校博物館の調査した全羅南道順天市雲坪里古墳群と嶺南文化財研究院の調査した慶尚北道大邱市鳳舞洞遺蹟の発掘調査に参加した。前者の現場は馬具の検出・図化作業を手伝ったのみで、短期間の参加であったが、韓国において馬具の出土状況を間近に見ることができた。後者の現場では2ヶ月間で1基の古墳を自分の責任で完掘するという貴重な経験をさせていただいた。前者は大学による純粋な学術調査、後者は開発による破壊を前提とした行政調査と、全く勝手の異なる二つの調査体制や調査方法を内側から見ることができたことは、非常に有益であった。

留学期間中は慶北大の先生や学生をはじめ、多くの韓国人の助けを得て、非常に快適に生活することができた。ただ、そのような韓国生活の中で驚いたことや考えさせられたことがいくつかある。一つ目は留学中にあったドイツワールドカップの時のことである。私は日本人留学生、そして中国人留学生と一緒に、大きなスクリーンのある大学の傍の麦酒屋に日本の初戦、オーストラリア戦の試合を見にいった。日本が先制している間は無邪気に喜びながら麦酒を飲んでいたのであるが、同点に追いつかれた瞬間、周りの韓国人たちから(店員も含めて)歓声が聞こえたのであった。私はその時まで、周りの韓国人が、実はオーストラリアを応援していたことに全く気づいていなかった。日韓戦ではない他国との試合で、日本に負けてほしいという潜在的な感情が、爆発する瞬間を目の当たりにし、非常にショックであった。実は韓国人が日本ではなくオーストラリアを応援していた背景には、監督が日韓ワールドカップで韓国を四強に導いたヒデ

イングで、彼がメディアに対し、「韓国国民のために日本に勝つ」といった類のコメントをして煽っていたということもあるが、その出来事以後、韓国の試合を素直な気持ちでは見られなくなった。もちろん麦酒屋で日本戦を見ることもなくなった。一筋の光明は、一緒に日本を応援していた中国人留学生がへこんでいる私たちを見て「同じアジアのチームが戦っているのに何であんな態度をとるんだ」と周りの韓国人に対して憤ってくれたことだった。もちろん留学生である彼の感情は、中国人の一般的なそれとは違うかもしれない。日本人の中にも似たような気持ちはあると思う。だからこそ我々留学生は異文化や他者に対する最大の理解者でなければならぬし、そういった考えを外国を知らない多くの人に伝えていかなければならぬと強く感じた。

もう一つは発掘中の出来事である。鳳舞洞の調査では私が担当する古墳に一人ないし二人の人夫さんがあてられ、一緒に発掘をおこなった。人夫さんは基本的に定年を過ぎた老人で、田舎ということもあって方言がきついが、普段は学生ばかりと付き合っていたこともあり、新鮮で楽しいものであった。人夫の中でも70歳以上の多くは植民地時代に学校教育を受けていたため未だに日本語を覚えている方も多く、特に私と一緒に発掘した李さんは私も知らないような昔の歌を歌い、日本のことを大変よく知っておられた。私は当然、李さんは何度も日本に来たことがあると思いついていたが、聞けば李さんは生まれてから一度も「日本」に行ったことがないという。死ぬ前に日本の温泉に入るのが夢だという李さんの言葉を聞き、私は複雑な気持ちになった。現在、日韓交流は急速なスピードで拡大している。日本の歌、漫画、映画が溢れかえっている。日本語を学ぶ学生も少なくないが、李さんは彼ら若者よりずっと流暢な日本語を操る。しかし、それは本人が自ら望んで習得したものではないのである。少なくとも過去を研究する私は、現在の交流の熱に浮かれず、20世紀の前半に起きた出来事をきっちり見つめた上で、韓国と向き合っていくべきだと改めて考えさせられた。

帰国後、出来る限り早くこの成果報告書を提出しようと思っていたが、なかなか筆が進まなかった。それは帰国後の忙しさにかまけていた私の怠慢のためでもあるが、何よりこの留学中の成果を客観化して記述することができなかつたためである。結局、1ヶ月経った今も、韓国における2年間の過去として捉えきることができなかつた。いつの間にか韓国という異文化が自分の体の一部になってしまうほどに2年間という歳月は長かったのかもしれない。今の私には日本の方が異文化である、という嘘になるがそれに近い気持ちなのである。こじつけかもしれないがこの留学の最大の成果は、20数年間慣れ親しみ、そして当たり前なものと思いついてきた日本人や日本文化というものを他者の視点から見つめなおせたことなのかもしれない。そして今の私の頭を覆うこのもやもやが無くなったとき、韓国人や韓国文化に対しても、またこれまでとは少し違った目から見られるのではないだろうか。少なくとも今の私は、この留学の意義をそのように捉えている。

最後に2年間の留学期間中、物心両面において助けていただいた松下国際財団の皆様方に心より感謝します。



順天雲坪里古墳群における馬具検出作業風景(右が本人)。



大邱鳳舞洞古墳群にて人夫さんと(左が李さん)。